考嶺の発掘

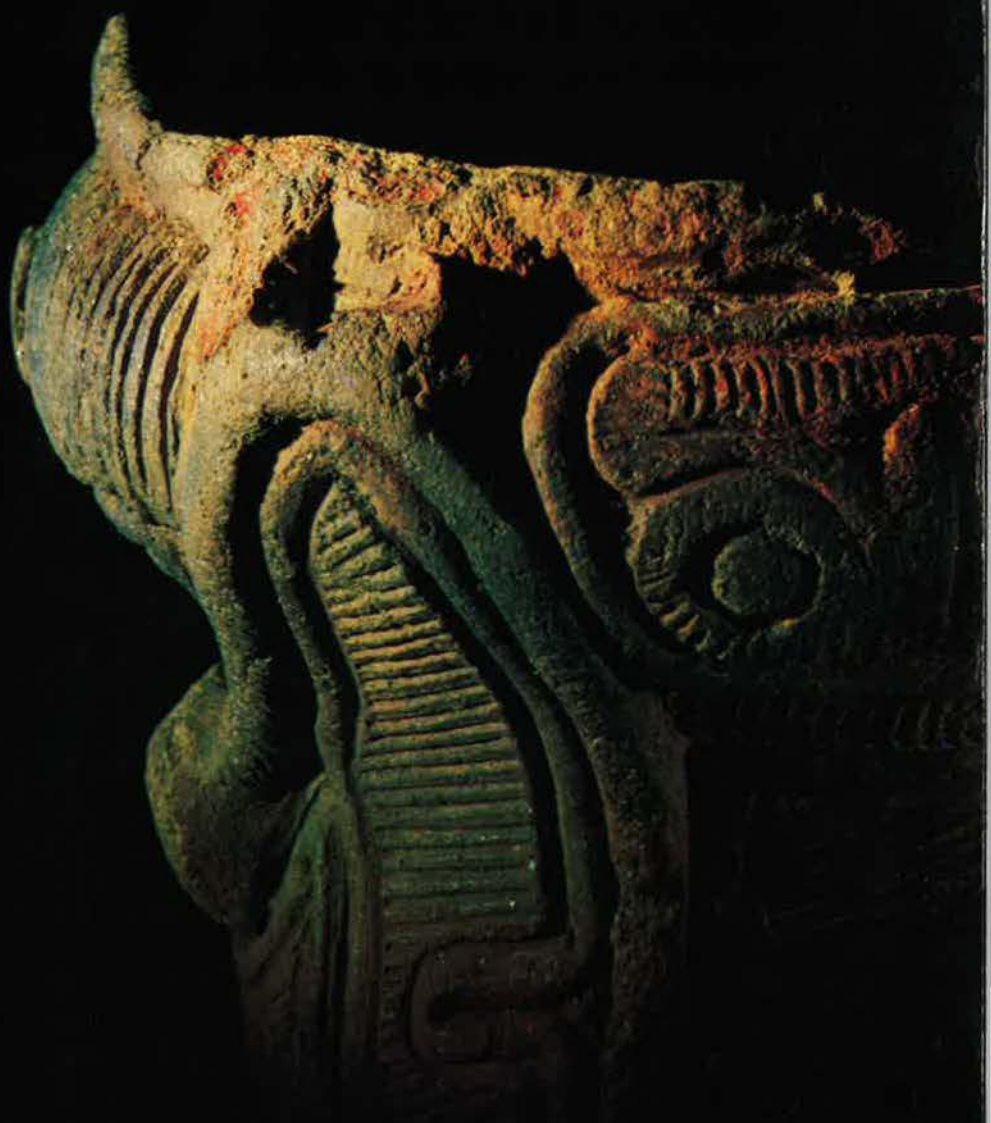


表　紙　　小型の甕形土器
縄文時代の竪穴住居跡より発見
―芳賀北部団地遺跡・昭和49年２月・
高さ　約10cm―

題　字　　前橋市教育委員会
教育長　金　井　博　之

芳賀の発掘

〈写真集〉

昭和56年度

前橋文化財研究会

はじめに

昭和48年度から始まった芳賀地区での発掘調査も、８年という長い歳月をかけて、昭和55年度にようやく終了することができました。

この発掘調査も、調査開始当初から市当局、前橋工業団地造成組合、地元の方々等この事業にかかわる多くの人々のご理解とご協力があったからこそ完遂できたものであります。調査も無事終了した今、改めてこれら関係の方々に厚く感謝する次第です。

「芳賀」という地名は、1,000年余り前に書かれた書物にも出てくる古いものです。この由緒ある地域の一画で、芳賀北部、西部、東部と三つの団地造成地内のほぼ全面を対象にした今回の調査は、その成果の上でも多くの貴重な資料を得ることができました。

遠い昔、芳賀の地に居を構えた人々の生活の跡、日常使用した食器、田畑の耕作にはげんだ様子を示す鎌や砥石など多くの資料が掘り出されました。現在これら資料の整理をすすめておりますが、その量も多く、終了までにはまだ年月を要します。

今回ここに収録したものは、多くの資料のうちの一部にすぎません。しかし、たとえ成果の一端であっても、できるだけ早く公表し関係していただいた方々のご協力に報いたいものと思いここに刊行する次第です。

この写真集を前に、古代の芳賀の人々のくらしに思いをはせていただければ幸いです。

昭和56年６月30日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1．本書は、団地造成にともなって、昭和48年度から昭和55年度にかけて発掘調査した芳賀北部団地遺跡、芳賀西部工業団地遺跡、芳賀東部工業団地遺跡より出土した遺構や遺物の写真をまとめたものである。

2．本書の構成は以下のようになっている。

(1)　写真編

遺構や遺物を時代ごとに紹介している。そして、各時代の初めには、その時代の概観をおく。

(2)　解説編

発掘調査についてまとめた「芳賀の発掘」と、掲載写真一点ごとに解説した「写真の解説」とからなる。

3．遺構や遺物は数多くあるもののうちから、その時代を代表すると考えられるものを厳選して載せた。

4．時代の区分は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代以降としたが、時代の中での遺構や遺物の配列については、新旧関係を問わなかった。

5．写真の解説は巻末にまとめ、平易な文章表現を心がけた。

6．遺物の写真撮影は、主に宇貫達男氏による。

7．本書の編集は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が行った。また、監修を松島榮治氏（前橋市文化財調査委員・県立第二高校教諭）にお願いした。

目　　次

赤城山のふところに抱かれた芳賀の地

縄文時代　3～12

縄文土器　3
石　斧　4
縄文時代の竪穴住居跡　5
敷石住居跡　6
縄文時代の土器　7
縄文土器にみる文様　9
幾何学文様をもつ縄文土器　10
石　器　11
いのししの顔　12
石皿と磨石・蜂の巣石

古墳時代　13～24

芳賀東部1号墳の石室　13
盛土の様子(芳賀東部1号墳)　14
発掘前の古墳(　〃　)
遺物の出土状況(　〃　)　15
出土遺物(　〃　)
古墳群(芳賀西部工業団地遺跡)　16
古墳より出土した土器(　〃　)　17
箱式棺状石室・埴輪棺(　〃　)　18
勾玉、管玉　19
古墳時代前期の竪穴住居跡　20
古墳時代の土器　21
土器の出土状況（160号住居内）　23
復元なった160号住居の土器　24

奈良・平安時代　25～40

大　甕　25
奈良・平安時代の竪穴住居跡　26
かまど跡　27
羽　釜　28
貯蔵穴　29
発掘風景　30
竪穴住居跡のあつまり　31
掘立柱建物跡・建築作業の様子　32
奈良・平安時代の土器　33
墨書土器・ヘラ書土器　35
製鉄跡　36
鉄製品　37
巡方・丸鞆　38
砥石・紡錘車　39
親子体験発掘　40

鎌倉時代以降　41～42

永楽銭　41
墓跡・五輪塔（空・風輪部）　42

昭和55年度発掘調査区全体

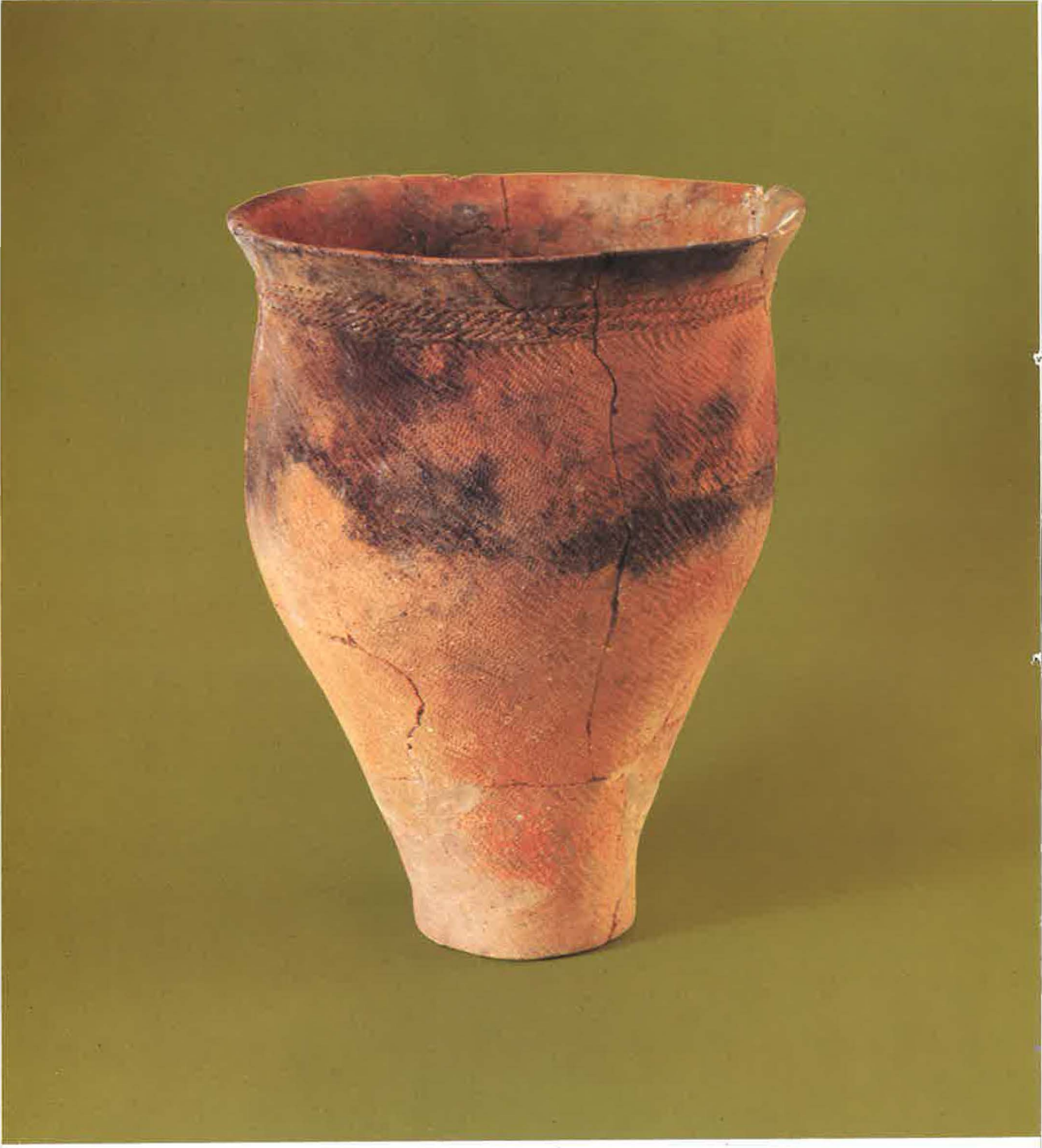
芳賀の発掘　45

遺跡の位置図　46

写真の解説　48

赤城山南麓に広がる芳賀の地。そこには縄文時代から現在に至るまで、人々の生活が営々と展開されてきている。

（航空写真・昭和55年6月撮影）



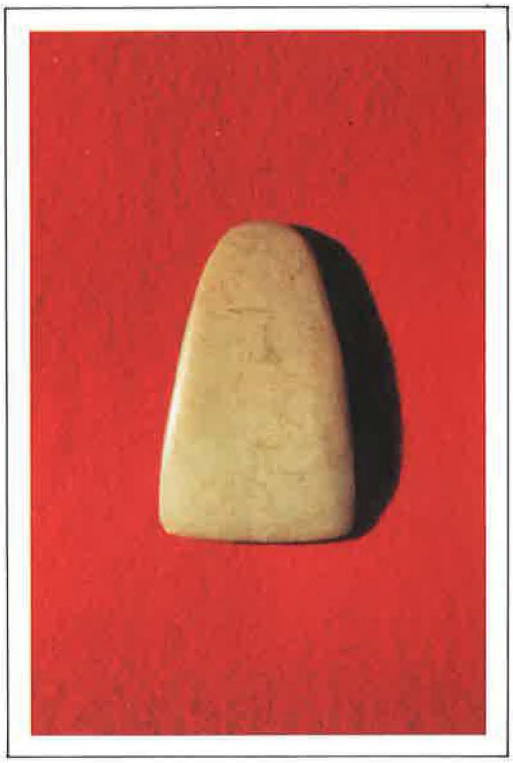
▲縄文土器
高さ　約34cm

縄文時代（今から約10000年～2300年前ごろ）

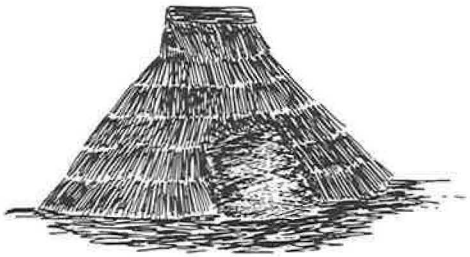
表面に縄目の文様をほどこした土器に代表される縄文時代、人々は野山にいのししやしかを追い、木の実をとる。こんな自然相手の生活が約8000年も続いた。

雄大な赤城山のふところに抱かれた芳賀の地は、縄文時代の人々にとって、ぴったりの土地だったのだろう。

米作りが始まったとされる弥生時代、人々は稲の作りやすい低地の方へ移っていったのかも知れない。このころの人々の生活の跡は、芳賀ではまだ発見されていない。



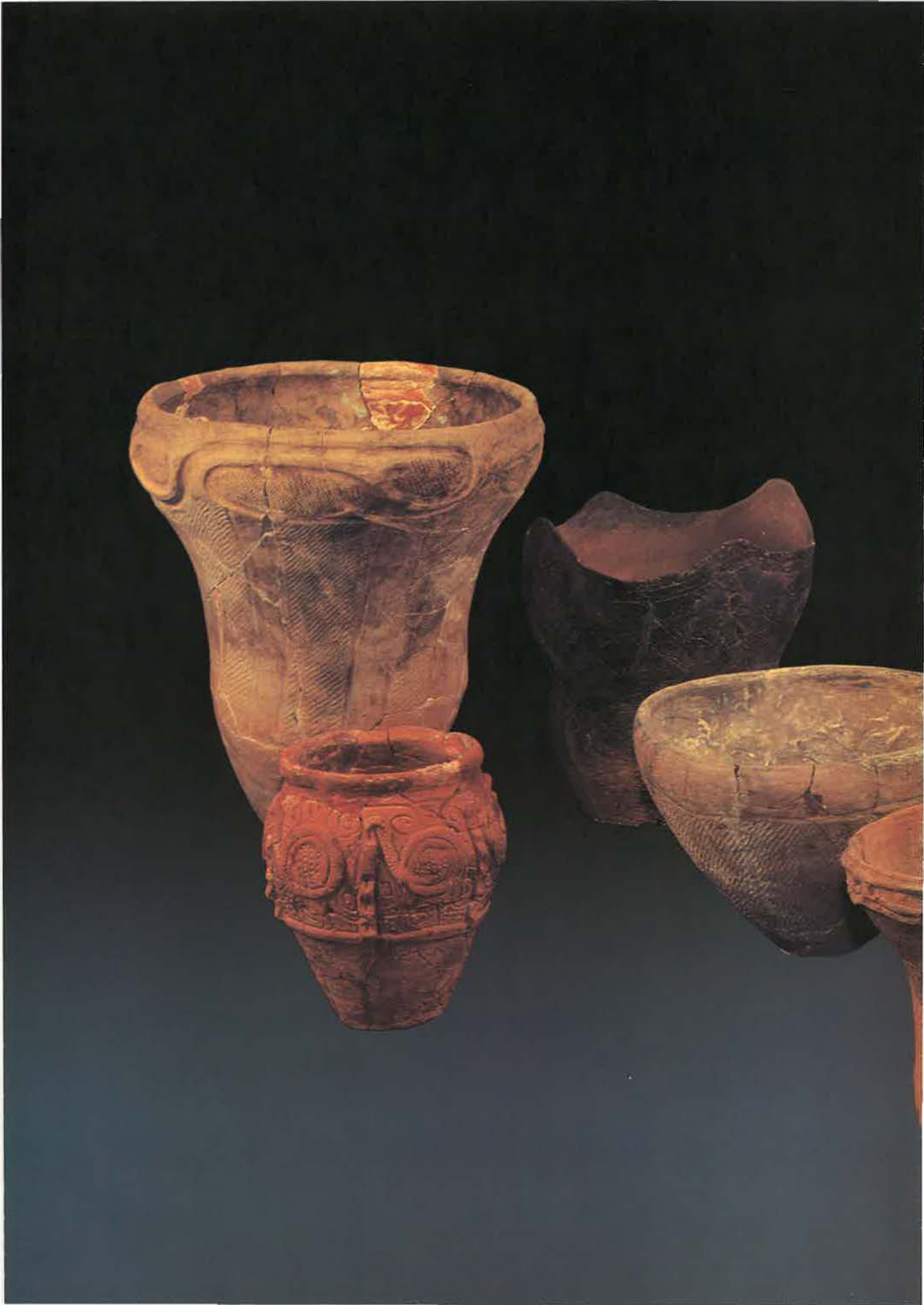
▲石斧（いしおの）
長さ　5㎝



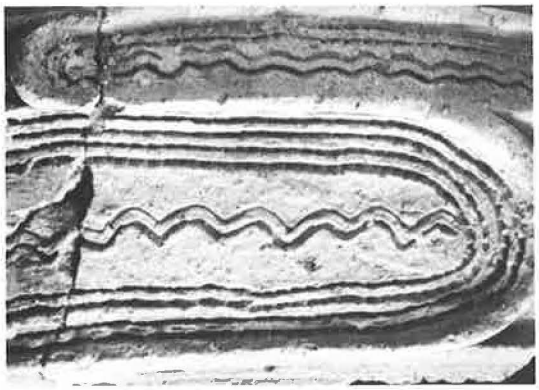
▲ 竪穴住居の復元想像図

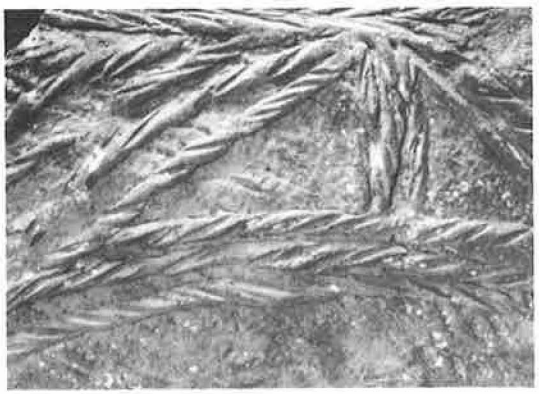
▲ 縄文時代の竪穴住居跡
約７ｍ×６ｍ

▲敷石住居跡
直径　約4.3m



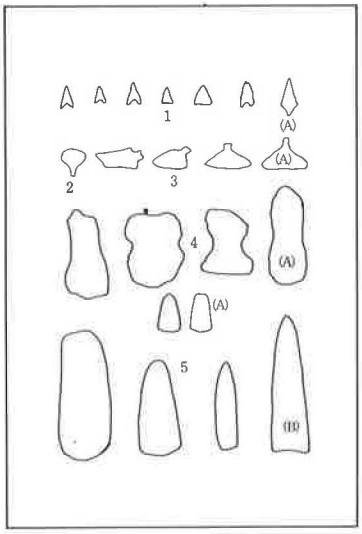
▲ 縄文時代の土器





▲ 縄文土器にみる文様

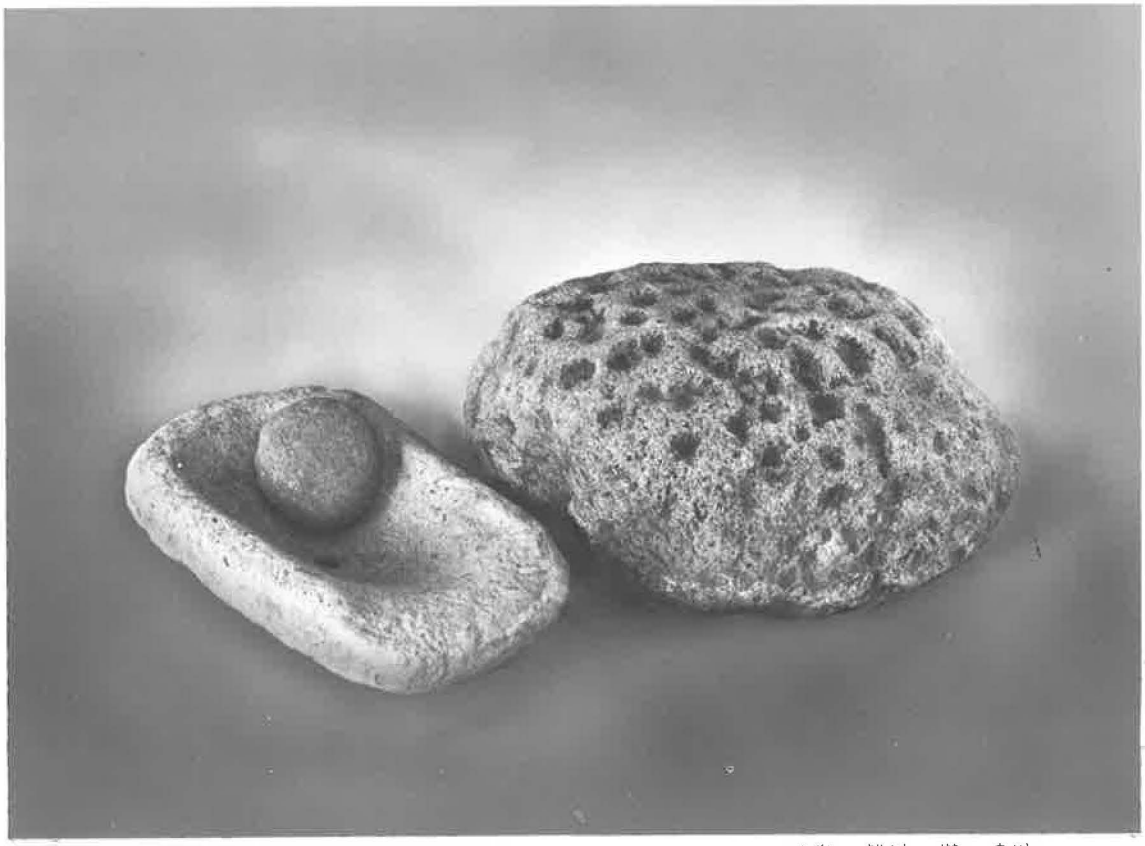
◀幾何学文様をもつ縄文土器
高さ 約27cm



1．鏃　（やじり）
　(A) 長さ　4.8cm
2．石　錐(いしきり)
3．石　匙(いしさじ)
　(A) 幅　6 cm
4．石斧(打製)〔いしおの(だせい)〕
　(A) 長さ　12.5cm
5．石斧(磨製)〔いしおの(ませい)〕
　(A) 長さ　5 cm
　(B) 長さ　17.5cm

▲ いのししの顔
長さ　約4 cm

◀ 石器



▲ 石皿と磨石、蜂の巣石
長辺　約31cm　　約37 cm×25cm×20cm

▲ 芳賀東部1号墳の石室
幅 約185cm 長さ 約335cm

古墳時代（今から約1700～1300年前ごろ）

盛土をして造った古墳に代表される古墳時代、群馬県は全国でも古墳のたくさんある所として知られている。

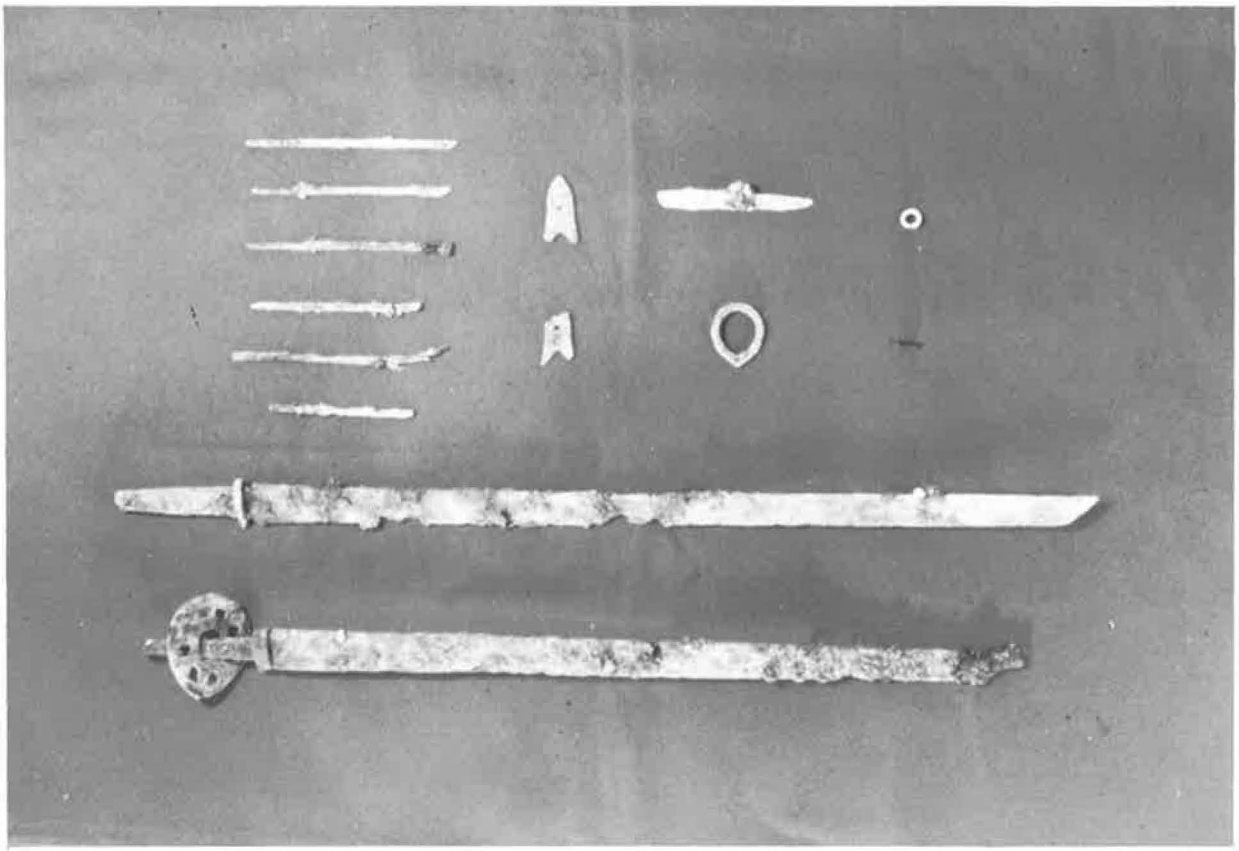
芳賀の地にも、赤城山を背にして大小の古墳があったことは、昭和10年の一斉調査や地域のお年寄りの話からわかる。

また、このころの竪穴住居跡からは、文様のついていない赤褐色の素焼きの土器（土師器）が見つかっている。

▲ 盛土の様子（芳賀東部1号墳）

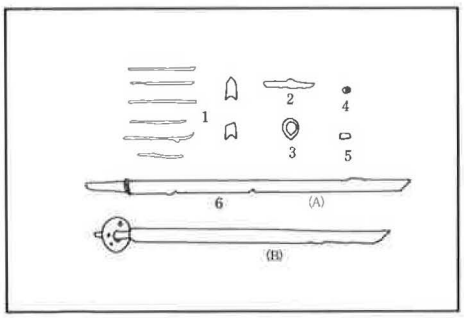
▲ 発掘前の古墳（芳賀東部1号墳）

▲ 遺物の出土状況（芳賀東部1号墳）

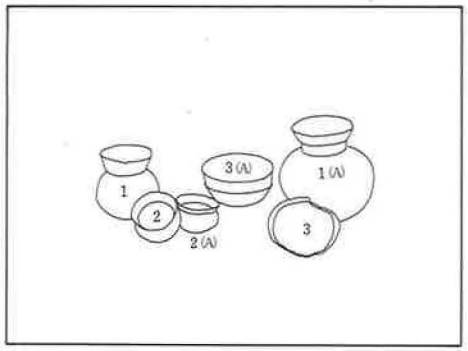


▲ 出土遺物（芳賀東部1号墳）

▲ 古墳群（芳賀西部工業団地遺跡）
直径　約13m～4 m



1．鉄　鏃(てつぞく)
2．刀　子(とうす)
　長さ 12cm
3．刀の金具か(かたなのかなぐ)
4．耳　環(みみわ)
5．管　玉(くだたま)
6．直　刀(ちょくとう)
　(A) 長さ 74cm
　(B) 長さ 68cm

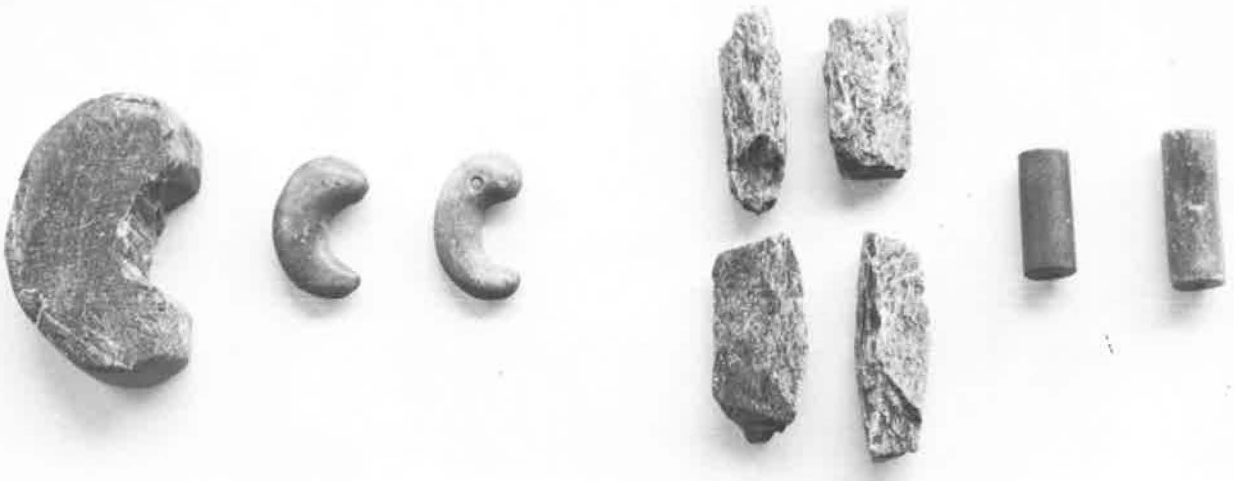


▲ 古墳より出土した土器
（芳賀西部工業団地遺跡）

1．壺 （つぼ）
(A) 高さ 約21cm
2．小型の壺(こがたのつぼ)
(A) 高さ 約6.4cm
3．坏 （つき）
(A) 高さ 約 7.5cm

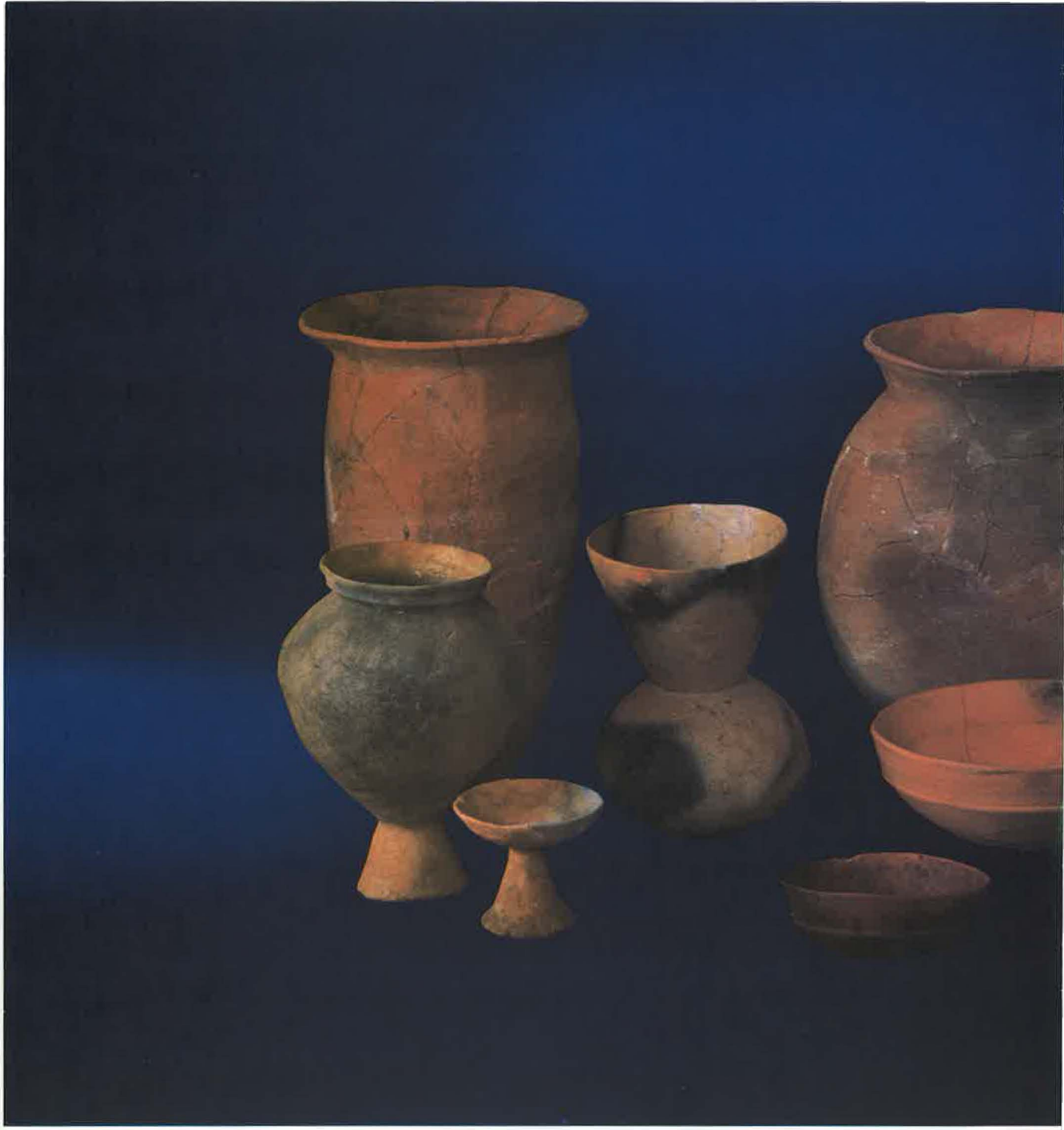
▲ 箱式棺状石室
（芳賀西部工業団地遺跡）
幅 約30cm 長さ 約138cm

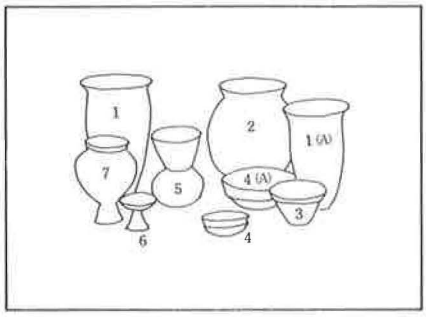
◀ 埴 輪 棺
（芳賀西部工業団地遺跡）
幅 約30cm 長さ 約85cm



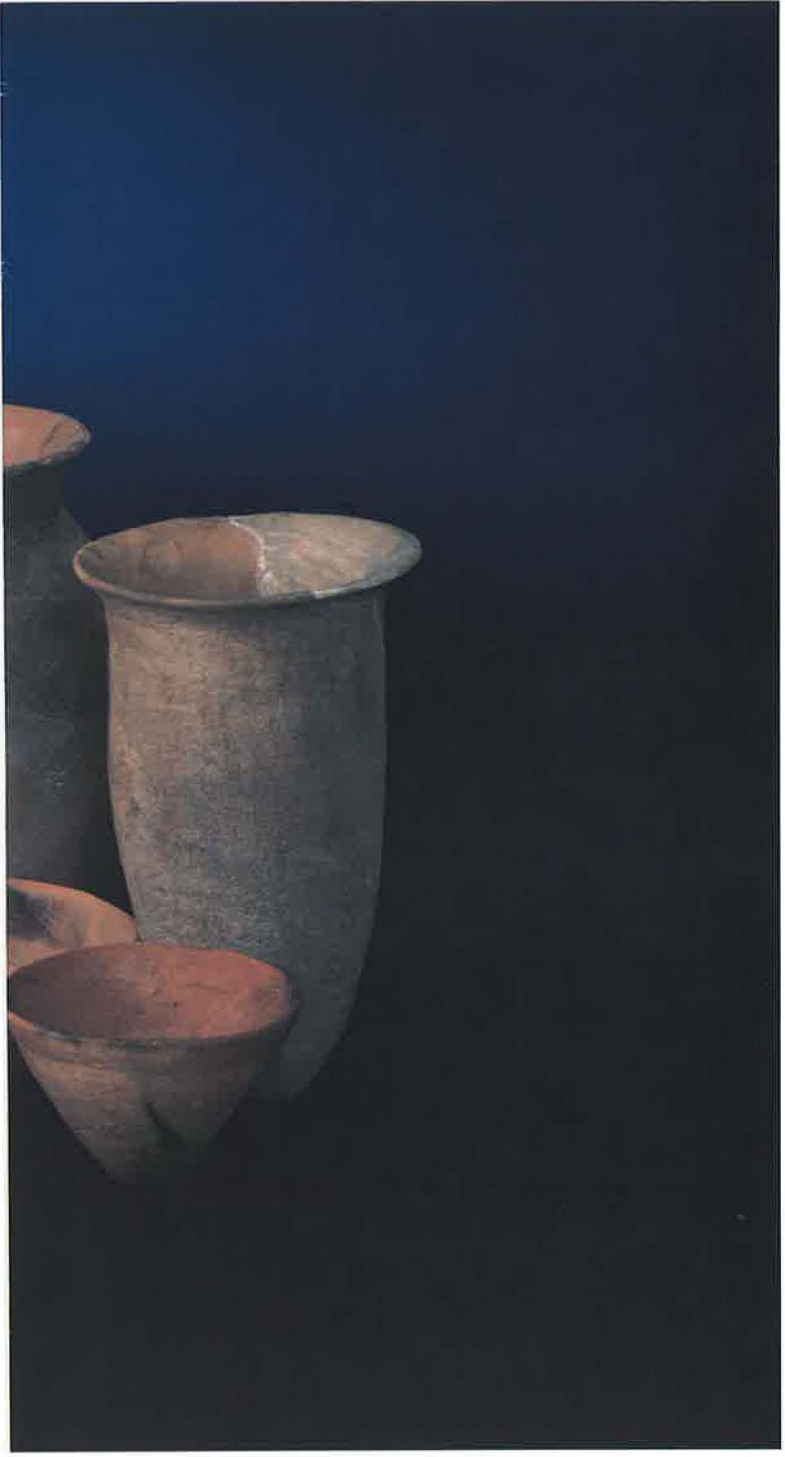
▲ 勾玉(まがたま)、管玉(くだたま)(大)長さ 2.3cm

▲ 古墳時代前期の竪穴住居跡
約 4.5m×4.3m

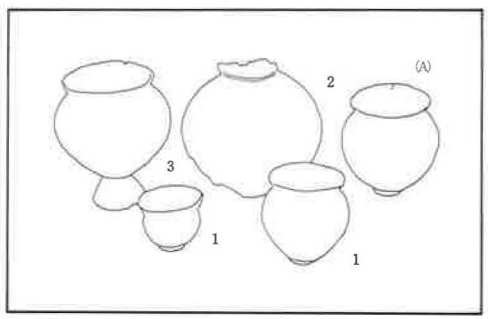




1．長甕(ながかめ)
　(A) 高さ 約30cm
2．甕（かめ）高さ 約33.5cm
3．甑（こしき）高さ 約9.5cm
4．坏（つき）(A) 高さ 約8.2cm
5．長頸壺(ながくびつぼ) 高さ 約20.7cm
6．高坏（たかつき）
7．脚付甕(きゃくつきかめ) 高さ 約22cm



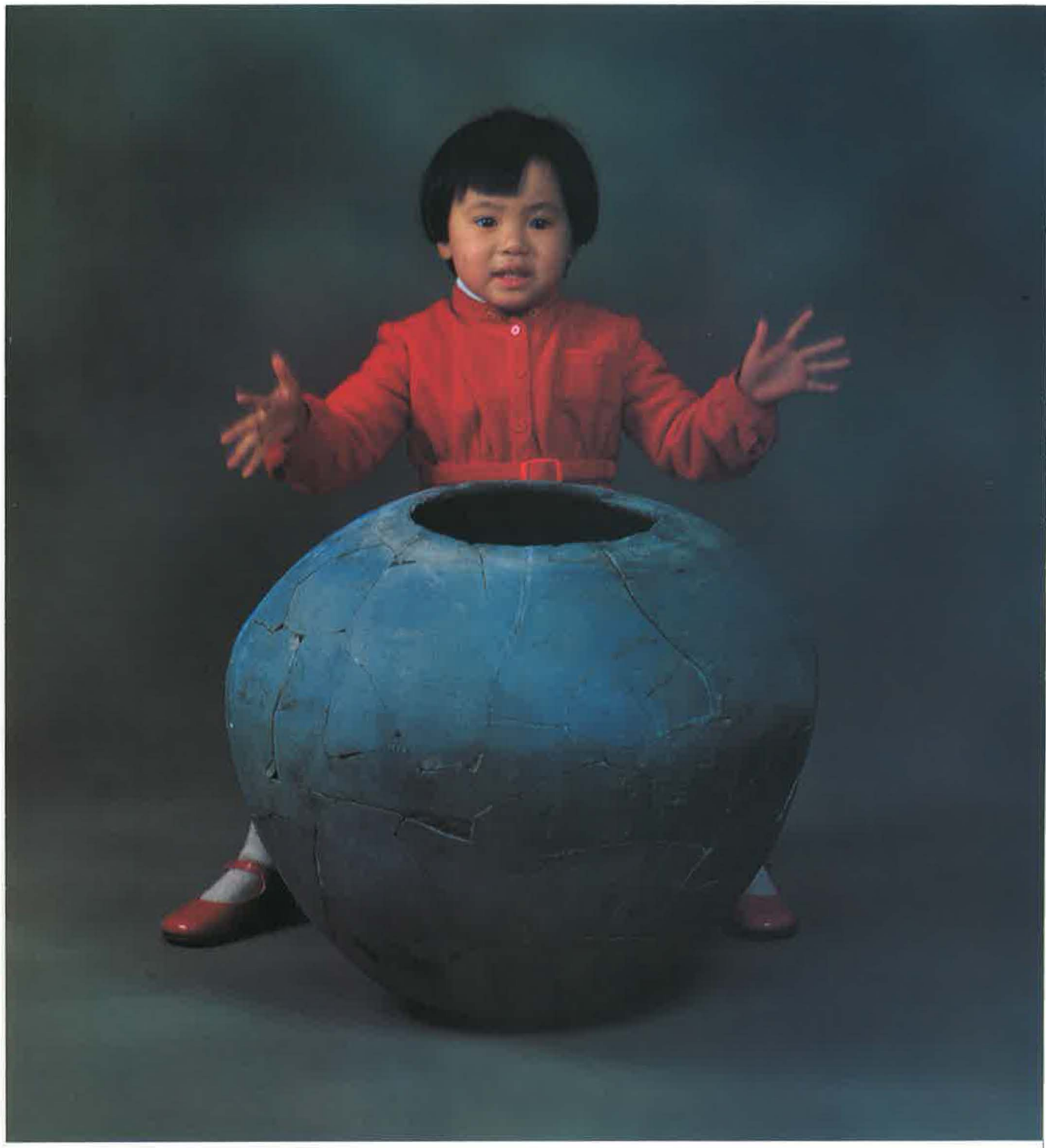
▲ 古墳時代の土器



1．甕　（かめ）
　(A) 高さ　約21cm
2．壺　（つぼ）
　高さ　約29cm
3．脚付甕（きゃくつきかめ）
　高さ　約27cm

▲ 土器の出土状況（160号住居内）

▼ 復元なった160号住居の土器



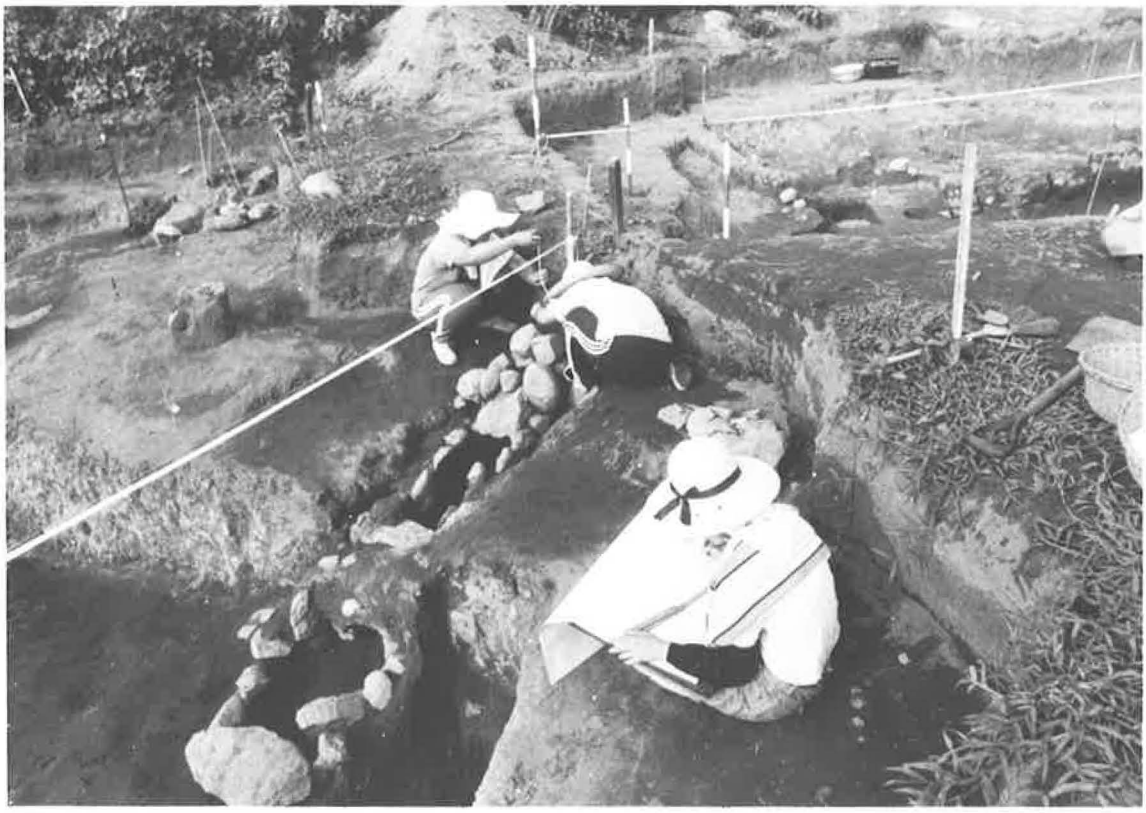
▲大甕
高さ 約46cm
一周(最大部)約165cm

奈良・平安時代（今から約1300年～800年前ごろ）

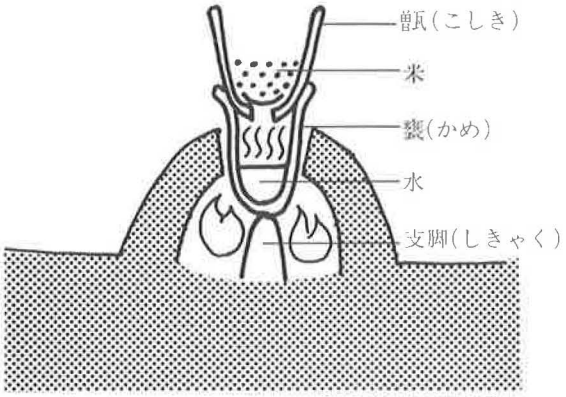
芳賀の地からは、数百にのぼる当時の竪穴住居跡が見つかっている。住居跡の壁には、かまどが築かれたり、床からは土師器に混じって、多くの須恵器や鉄製品が見つかったりして、生活用具に変化の生じたことがわかる。

平城や平安の華やかな都にくらべ、人々の多くはいぜんとして竪穴住居での生活を続けていた。

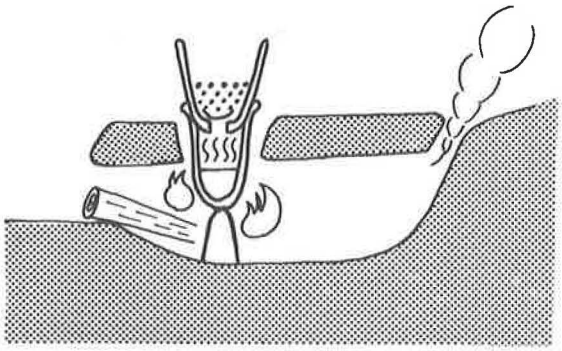
▲ 奈良・平安時代の竪穴住居跡
約 2.8m×2.4m



▲ かまど跡
長さ 約2.4m



▲ 正 面 図



▲ 断 面 図

かまどの復元図

▲羽釜
高さ 約25cm

▲貯蔵穴

▲掘　る

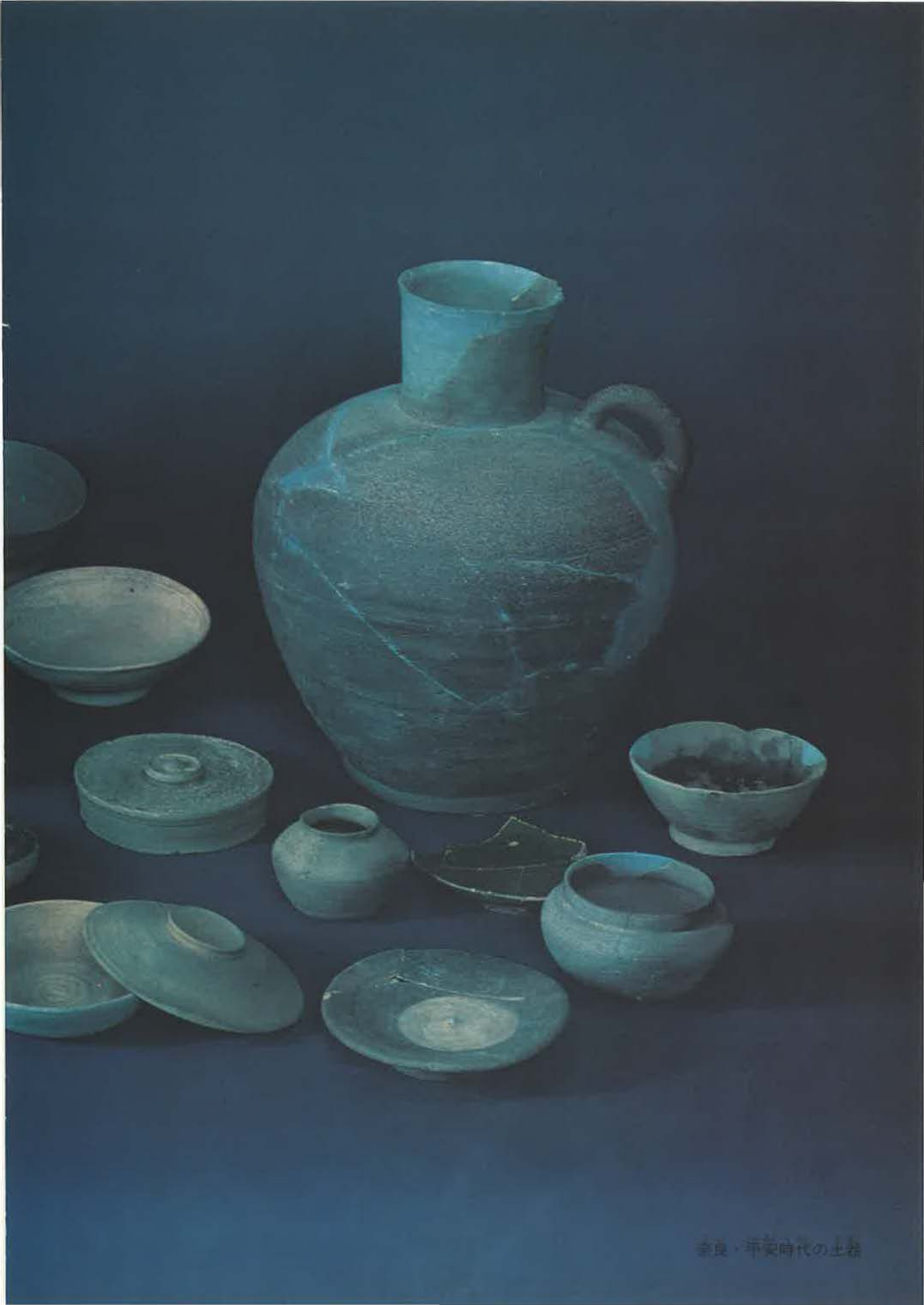
▲一　服

発掘風景

▲ 竪穴住居跡のあつまり

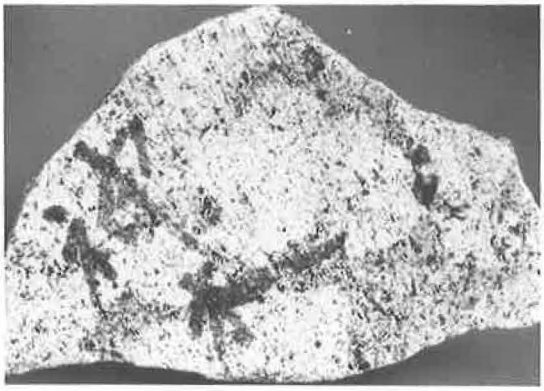
▲ 掘立柱建物跡

◀ 建築作業の様子
—春日権現絵巻より—
（鎌倉時代）



奈良・平安時代の土器

「林　殿」



「神　木」

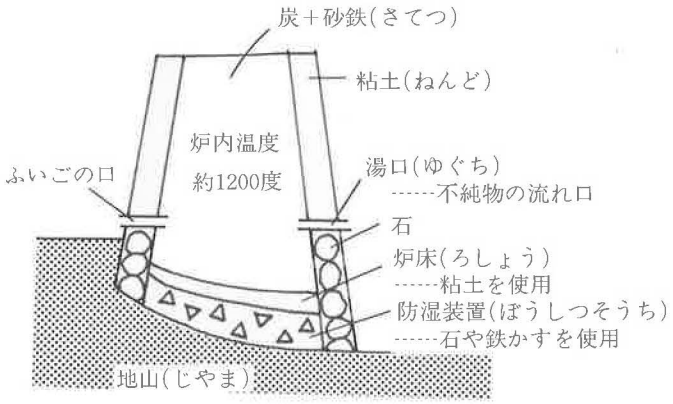
「田」か

「千　万」か

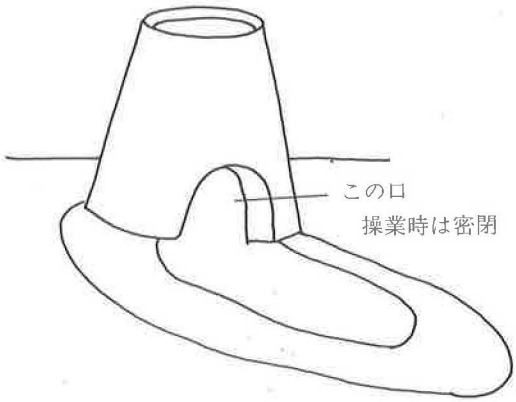
「僊　所」か

「大」

▲ 墨書土器・ヘラ書土器



▲ 断　面　図

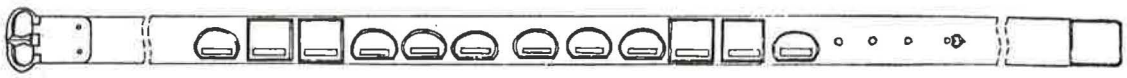


▲ 見　取　図

製鉄炉復元想像図 —— 井上唯雄氏教示 ——

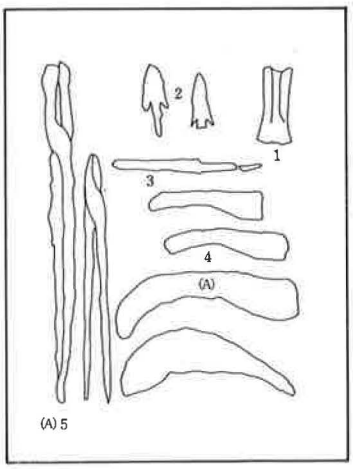
▲ 製鉄跡(せいてつあと) 約5m×4m

◀ 巡方（じゅんぼう）
3.3cm×3cm



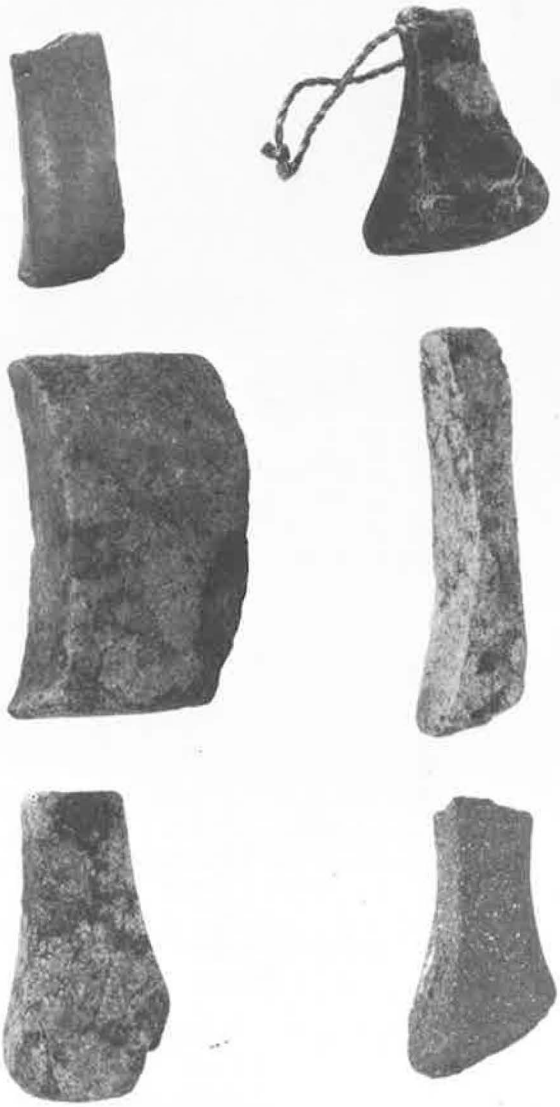
▲ 復元された銙帯の図
—『東北考古学の諸問題』より—

◀ 鉄製品（てつせいひん）
（保存処理済）



1．鉄斧（てっぷ）
　長さ 8.5cm
2．鉄鏃（てつぞく）
3．刀子（とうす）
4．鎌　（かま）
　(A) 長さ 約23cm
5．鉄鉗（かなばし）
　(A) 長さ 約40cm

▲ 丸鞆（まるとも）



▲砥石
（左中）長さ　12cm

▲紡錘車
（右下）直径　6.3cm

▶紡錘車のつかいかた
『原始人の技術にいどむ』
国民文庫より

親子体験発掘

1980・8・24(日)

「発掘は予想以上に重労働だった。移植ゴテなどでみつけているときはいいが、土をはこぶのはまったくつらい。

けれども掘っていて遺物が出てきたときは、とてもうれしかった。ふだんやっている作業員の人たちは、そうとうきついと思う。

歴史を解き明かすというのは、まったくじみな仕事だと思う。」

中二・男子

▲ 永楽銭
直径 2.5cm

鎌倉時代以降（今から約800年前ごろ～）

鎌倉時代以降の歴史を語るものは、城跡や武士の住んだ館跡、そして墓跡などである。

芳賀中学校の南に館の堀跡が見つかった。高台に館をかまえた武士でもいたのだろうか。また、古代や中世にあって集落を作っていた芳賀の地も、何かの理由で荒れ果ててしまい、つい８年ほど前までは一面、畑や桑畑が広がっていた。

▲ 墓跡
約80cm×50cm

▲ 五輪塔（空・風輪部）
（右）長さ 28cm

昭和55年度発掘調査区全体(芳賀東部工業団地遺跡)

何千年、何百年もの眠りからさめたむかしの人々の生活跡。台地いっぱいに住居跡が、溝が展開されている。

過去において一大集落地だった芳賀、現在また住宅団地、工業団地としてよみがえろうとしている。歴史的な運命を感じさせる芳賀の地でもある。

(航空写真・昭和55年11月撮影)

芳賀の発掘

赤城山のふもとに大きくひろがるゆるやかな傾斜地は、古代の人々にとっても絶好の生活の場であった。ここに住んだ人々は、いつの頃、どんな家に住み、どんな道具を使い、どのようなくらしをしていたのだろうか。傾斜地に立って赤城の山を見つめていると、遠い昔へのさまざまな想像と疑問がわいてくる。

芳賀地区で40万㎡という広い範囲のほとんど全面を発掘した今回の調査では、こんな疑問を解くための数多くの貴重な資料を得ることができた。ここで掘り出された人々のくらしの跡、日常使用された土器などの道具類の数はたいへんな量であり、現在整理をすすめているところで細かな疑問についてまで解決するにはまだ時間を要する。ここでは、遺跡の発掘全体をとおしてみたいくつかの大きな特長をあげて、まとめにかえることとする。

特長の第1は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、さらには、中世・近世から現代にいたるまで、ほとんどの時代にわたって人々の生活の場として利用されているこの地域で、縄文時代の後に続く弥生時代の人々が生活した痕跡だけは、どこにも見当らなかったことである。

弥生時代というと、日本では農耕、特に水田耕作が始められたときである。県内でも高崎市周辺数箇所で、この時代の水田跡が発見されている。井野川などの川の流域、湧き水のある低い谷地等水に恵まれたところである。水田耕作には水が欠かせない。芳賀の地区は赤城山のふもとにひろがる傾斜地で、今でも畑が多いところである。水田耕作にはけっして適したところではない。水田耕作を知った人々は、水に不便なこの地には住まず、ここより低い平地に移り住んだのであろうか。

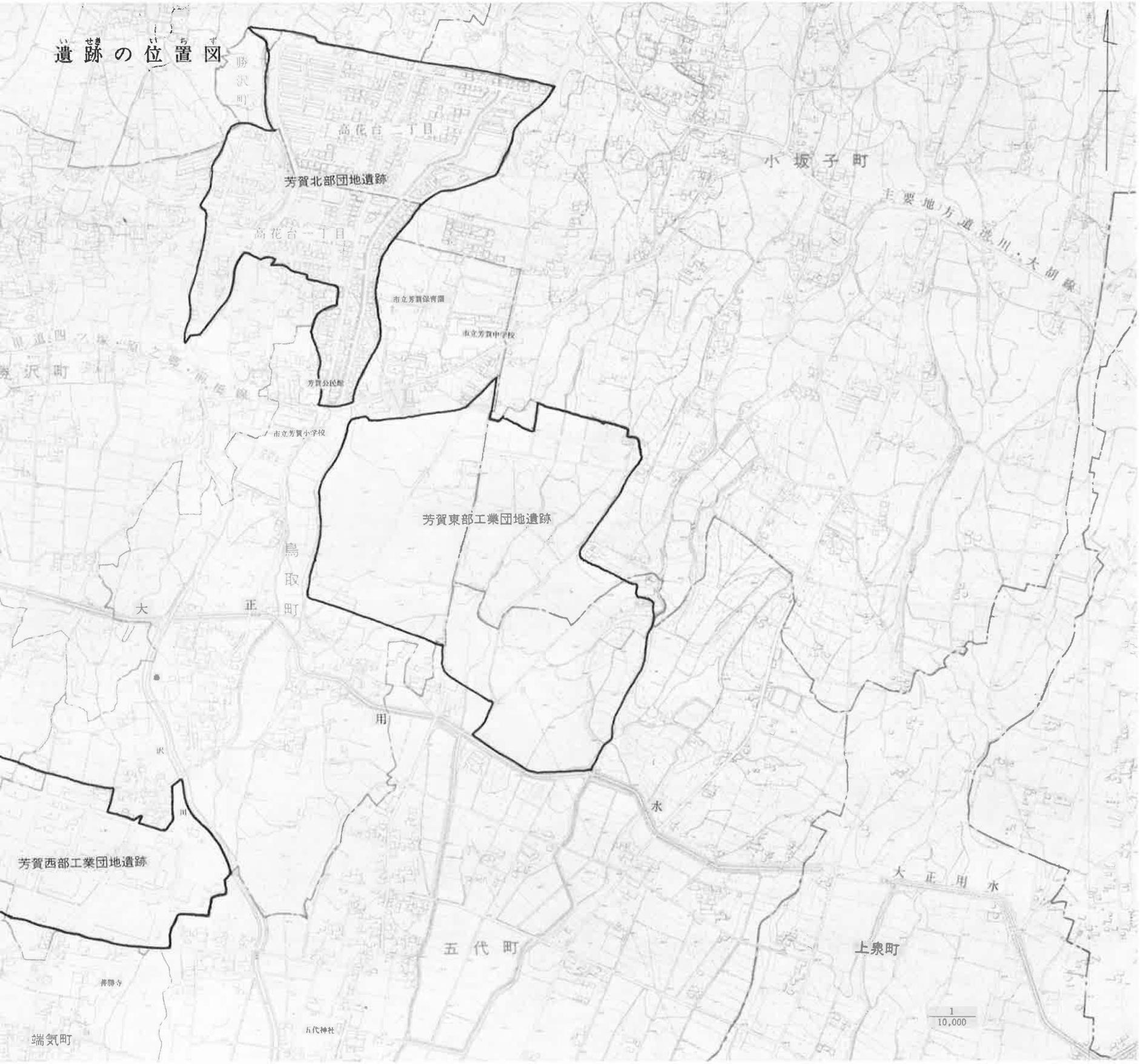
ところが、弥生時代の後に続く古墳時代になると、人々は再びこの地で生活を始める。

特長の第2は、古墳時代に続く奈良・平安時代の住居が数多く発見されており、この時期になって、ここに住む人々が急に増していることである。発見された住居の跡もこの時期のものが最も多い。水田耕作はもちろん人々の生活を支える基本であった。弥生人が住まなかったこの地に、奈良・平安時代の人々が数多く生活することができた背景には、農業技術、特に、かんがい技術の進歩が読みとれる。この時代の住居が多く発見された台地の東西には低い谷地がある。この谷地は、現在でも水田として利用されているが、おそらく、奈良・平安時代にあっても、ここを開発し、水田として利用したものであろう。

特長の第3は、平安時代に書かれた書物「和名類聚鈔」に出てくる郷(村)と関係させて考える一つの資料が得られたことである。この書物によると、勢多郡内に九つの郷があるとし、その中の一つに「芳賀郷」がある。勢多も芳賀も昔から使用されていた地名である。古い書物に書かれた村落がどこにあったのか現在その位置は明確でない。芳賀郷も同様である。しかし、今回調査した地域に奈良・平安時代の住居が最も多く発見されていることから、この書物との関係を調べる糸口がみつかったと言える。もちろん、調査したところが芳賀郷の中心地と言い切ることはまだできない。

今後数多くの資料が整理され、芳賀地区の他の区域の調査がすすめられる中で、もっと多くの、そして細かな事実も明らかになろう。

遺跡の位置図



芳賀の発掘

1．芳賀北部団地遺跡

調査面積　約 6.1ha

調査期間　昭和48年５月～昭和50年２月

内　　容　縄文時代の竪穴住居跡　27

奈良・平安時代の竪穴住居跡　231

勝沢城跡・その他

2．芳賀西部工業団地遺跡

調査面積　約 2.5ha

調査期間　昭和50年５月～12月

内　　容　縄文時代の竪穴住居跡　7

古　墳　跡　31

その他

3．芳賀東部工業団地遺跡

調査面積　約33ha

調査期間　昭和51年５月～昭和55年11月

内　　容　縄文時代の竪穴住居跡　58

古　墳　跡　4

古墳・奈良・平安時代の

竪穴住居跡　495

〃　掘立柱建物跡　189

そ の 他

写真の解説

〈縄文時代〉

P.3　縄文土器

いったん火を受けるとかたくなる粘土を、人はのがさなかった。

この大発見が土器を生み、ものの貯蔵を可能にした。以来、土器は人々の生活を大きく支えてきた。

今から約10,000年ほど前から作られ使用されてきた縄文土器、表面に縄目の文様があるところからこの名がついた。

P.4　石斧

土器よりも前に人との出合いをした石器は、武器となり道具となった。

写真は、縄文時代の竪穴住居跡から発見された磨製の石斧である。芳賀の発掘調査では、こうした石斧が3個ほど見つかっている。

遠いむかし、人の手ににぎられた石斧、にぎった人の力を、汗を、においをじっと秘めているかのようだ。

P.5　縄文時代の竪穴住居跡

どうくつやほら穴での生活に別れを告げた人々は、地面を掘りくぼめ、その上に屋根をかけた住居を作った。この住居を竪穴住居という。

住居跡の多くは円形か方形をしていて、直径または一辺が4～5mほどである。人々は床に葉や樹皮などを敷き、寝起きしていた。床からは炉の跡が見つかる場合が多い。炉に燃えた火は人々の暖となり、明かりとなり、ものを焼いたりするのに使われたことだろう。

竪穴住居こそ今日の家の原形である。

P.6　敷石住居跡

床に平べったい石を一面敷きつめた敷石住居には、出入口を思わせるような突き出た部分をもつものもある。また、床の中央部には石で囲った炉が多く見うけられる。

敷石住居は日常生活のためのものでなく、儀式をする場であったとする考え方もある。いずれにしても縄文時代の中期から後期にかけてしか見られない特殊な住居跡である。

P.7～8　縄文時代の土器

土器は、ひも状にした粘土を巻きあげたり、輪にして積みあげたりして作られた。使用された期間が約8,000年にも及ぶ縄文土器には、貯蔵を中心とした深鉢形土器、浅鉢形土器、そして壺形土器などがある。

土の香りとあたたかみが漂う縄文土器である。

P.9　縄文土器にみる文様

土器がなま乾きのとき、撚ったひもを表面に回転させたりして縄目文様がつけられた。しかし、文様は縄目だけでなく、篠の切り口や貝がらのふちを押しつけたものや、線を刻んだり、粘土をはりつけたりしたものも見られる。

文様からは、土器を一生懸命に作る縄文時代の人々の姿が浮かんでくるようだ。

P.10　幾何学文様をもつ縄文土器

この土器の文様は、現在わかる範囲で横に五分割されている。分割された部分には線がジグザグに走る。しかも、ジグザグのテンポを上段と下段でひとつずつずらして、頂点が接近したりはなれたりすることにより、文様に変化を与えている。

幾何学など全く発達していなかったころ、空間を均等分することの美しさを、そしてバランスをくずして生まれる文様のおもしろさを、人はすでに見い出している。

P.11　石器

人は石の中に斧や鏃の姿を見た。石を打ちかき石斧や石の鏃を誕生させた。人々はこのように石

のもつ特性を知り、最大限に生かして多種多様の石器を作ってきた。

鏃　＝矢の先につけ、狩猟や漁ろうに使用。
石錐＝木の皮、石などに穴をあけるとき使用。
石匙＝獣の皮をはいだり、肉を切るとき使用。
石斧＝ものを切ったり、削ったりするとき使用。
　　また、土掘りのときにも使用。

なお、石器は製法から打製石器と磨製石器とに大別できる。

打製石器＝石を打ちかきながら作った石器。
磨製石器＝石を打ちかいたあと、みがきをかけて形を整え作った石器。打製石器よりも新しく出現した技法の石器である。

P.12　いのししの顔

いのししやしかは、縄文時代の人々にとってたいせつな食料だった。

土器の飾りだったのだろうか、いのししの表情からは、豊かな収穫を願った縄文時代の人々の祈りが感じとれる。

石皿と磨石、蜂の巣石

木の実などをすりつぶした石皿と磨石（左）。よく使いこんだらしく、石皿の底には穴があいている。また、発火のさい使用したとされる穴、木の実を割るときに固定したともいわれる跡のある蜂の巣石（右）。

縄文時代の食生活の一端がしのばれる。

〈古墳時代〉

P.13　芳賀東部１号墳の石室

写真は天井の石が取り除かれた古墳の石室を、真上から見た様子である。石室の石が裏ごめによって、しっかりと補強されていることがわかる。

石室には、入口をもたない竪穴式石室と写真のように入口のつく横穴式石室の二種類がある。とくに横穴式石室の場合、遺がいを納める玄室とそれに通じる羨道とからなり、時による変化が見られる。玄室の入口が両方に広がる両袖型（写真）、片方にしか広がらない片袖型、全く広がらない袖無型の３タイプに分類できる。

P.14　盛土の様子（芳賀東部１号墳）

土を、石を運んだ人の汗がしみこんだ古墳を今たち割る。そこには、古墳を計画的に築いていった跡が残っている。

芳賀東部１号墳の造り方を資料から推測すると、

(1)　玄室になる部分を掘り下げる。
(2)　玄室の最下段の石を組み、裏ごめをし土盛りをする。これを繰り返して玄室の壁を高くしていく。同様に羨道部の壁も築いていく。
(3)　玄室および羨道部を天井石でふたをして、全体的に土盛りをしたり、回りに堀（周堀）を作り古墳として完成させた。

古墳は、当時の土木技術の優秀さをはっきりと語っている。

発掘前の古墳（芳賀東部１号墳）

古墳はその外形から、円墳、方墳、前方後円墳などに分類できる。

この芳賀東部１号墳は調査の結果、７世紀後半に造られた直径約20ｍほどの円墳と考えられる。

P.15　遺物の出土状況と出土遺物（芳賀東部１号墳）

石室内から直刀二振り、鎌11本、刀子（小刀のようなもの）１本、耳環と管玉（P.19参照）が各１個ずつ出土している。こうした副葬品とともに葬られた人は、いったいどんな人だったのだろうか。

権威の象徴であった古墳も６世紀後半に入ると一部の支配者たちだけのものでなくなる。そして8世紀になると古墳はその姿を消していく。

P.16　古墳群

芳賀西部工業団地遺跡では、堀をもった古墳の跡と見られるものが30ほど確認され、古墳群と推定されている。

土盛りをした部分（墳丘部）は、古い時期に削りとられ石室などがはっきりしないものも多い。しかし、耳環や土器など多くの出土品を見た。

P.17　古墳より出土した土器

葬った人に何かを供えたときに使用した器であろうか、赤褐色の土器（土師器・P. 21～22参照）が古墳群の周堀から発見されている。

P.18　箱式棺状石室

石で四方を囲み、石のふたをした埋葬施設。

埴輪棺

円筒状の埴輪（円筒埴輪）を二つ合わせて、その中に遺がいを納めた埋葬施設。

P.19　勾玉、管玉

動物のきばのような形をした勾玉、篠の筒のような管玉が、竪穴住居跡などから発見されている。とくに、昭和55年度の調査では、製作途中の勾玉や管玉も見つかり、製造過程を知るうえで貴重な資料を得た。

管玉の穴を観察すると、太さが一様でない。このことは、両端からの穴あけがいかにむずかしかったかを物語っている。

P.20　古墳時代前期の竪穴住居跡

縄文時代に見る竪穴住居と同じようなつくりをしているが、石で囲った炉はなく床の上で直接火を燃やしていたようである。

床に見られる四つの深い穴は、柱を立てた穴（柱穴）である。

この住居の中で、空が晴れるのをじっと待った日もあったろう。また、あしたの仕事のことを話しあう夫婦の姿もあったろう。家族の生き様を静かに語りかける竪穴住居跡である。

P.21～22　古墳時代の土器

この時期には、仕事に分業化が見られ、土器を専門に作る人々も出てくる。この人々は縄文土器にくらべ、文様のない赤褐色の素焼きの土器を焼いた。こうした土器を土師器という。

土師器は弥生土器の系統をひくもので、形もいろいろある。

長甕＝中に水を入れてかまどにかけて煮沸に使用。甑と組ませての使用もある。

甑　＝底に穴があけられ、甕の上にかけ、甑の中の米をむした。「せいろ」の原形（P.27参照）

長頸壺＝液体を入れる容器。

坏　＝食べものを盛った。今日の「茶わん」。

高坏＝酒などを飲んだり、ものを盛るのに使用。

縄文土器にくらべ、ずっと薄手になった土師器には、用途のちがいによる形のおもしろさが見い出せる。

P.23　土器の出土状況（160号住居内）

火災にでもあったのだろうか、壁ぎわから炭化した木材が多く見つかった160号住居。当時の生活用具（土師器・P.21～22参照）がセットで出土している。

P.24　復元なった160号住居の土器

土器のかけらを一片一片洗い、住居番号を記入して接合する。復元には根気が要求される。

復元の結果は、煮沸に使用した脚付甕をはじめ壺、甕、小型甕などであった。こうした土器も160号住居に住んでいた家族の食生活を支えていたわけである。

〈奈良・平安時代〉

P.25　大甕

火災にあったと考えられる住居跡から、須恵器（P. 33～34参照）の大きな甕とみられる破片がたくさん出た。復元には一週間ほどかかった。

この中に水を貯えたのだろうか、それとも酒でも醸造したのだろうか。

このころになると須恵器は生産も増え、一般の竪穴住居跡からも多く見つかっている。

P.26　奈良・平安時代の竪穴住居跡

この時期の住居には、必ずといっていいほどかまどが見られる。そして、その近くに貯蔵穴をもつものが多い。住居の形は方形がほとんどであり、なかには壁の一部を拡張して「張出し部」を作るものや、かまどのわきに「たな」のようなものをもつ住居もある。

床も地山の土とちがった土をつき固めた「貼床」が見られ、住みよいマイホームを作る人々のたゆみない努力をしのぶことができる。

P.27　かまど跡

言うまでもなく、かまどはものを煮炊きする施設であり、人々の食生活を支えてきたものである。

かまど跡をのぞくと、火がよくまわるための支脚（支石）、この写真のように石を組んで作った煙出、季節風をさけるためか多くのかまどが東壁に設置されているなど、人々の生活の知恵が随所に生かされている。

P.28　羽釜

かまどにかける土器にも変化が見られ、土器の上部につば（羽）をつけたものが登場してくる。

この中に水を入れてかまどにかける。羽釜の上にのせられた甑の中のものを蒸気でむした。近畿地方では土がまとセットになって発見される例が多く、近畿地方の影響を受けて出現したものとも考えられる。

P.29　貯蔵穴

貯蔵穴といっても、大部分は中から灰や炭化物、土器のかけらなどが出てくる。はたしてものを貯蔵したのか疑わしくなってくる。しかし、ときには写真のように甕を利用して作られたものもある。

P.31　竪穴住居跡のあつまり

かまどや貯蔵穴をもつ竪穴住居の跡が、芳賀の地に広く展開されている。竪穴住居跡のあつまりは、いったい何を意味しているのだろうか。

平安時代に書かれた和名類聚鈔によると、勢多郡には九つの郷が置かれたという。そのひとつに芳賀郷が記されているが、どこに存在したかは現在不明である。これらの住居は郷を構成する一部ではなかったろうか。

P.32　掘立柱建物跡

掘立柱建物は竪穴住居と異なり、地表に柱穴を掘り、柱を立てて屋根をかけた建物である。板の床をはったものもあったようだ。規模は2間×2間、2間×3間のものが大部分をしめている。

芳賀では、こうした建物跡が200棟分ほど発見されている。この中には床を高くして、湿気をきらう米を貯蔵した倉庫もあったと考えられる。

下の絵は鎌倉時代にかかれたものであるが、水糸をはり水平を出している様子や柱穴を掘って柱を立てている様子がよく表現されている。同じような方法で芳賀でも掘立柱建物が作られていったのだろう。

P.33～34　奈良・平安時代の土器

芳賀に見るこのころの土器には、土師器に混じって灰色をした須恵器が多くある。須恵器は朝鮮から伝えられた製法で作られた土器である。古墳などからも出土している。

特殊な窯を使い高温で焼きあげられた須恵器は、土師器にくらべてずっとかたい。また、上薬のついた灰釉陶器や緑釉陶器も発見され、土器の製作技術が一段と進歩したことがわかる。

ところで、須恵器のさかんに使われるようになったこのころになっても、煮沸用には土師器の甕を使ったらしい。そして、食器には土師器や須恵器の坏や皿が主に使用された。

写真中央より左側の赤味がかった土器類が土師器、右側の灰色した土器類が須恵器である。

P.35　墨書土器・ヘラ書土器

墨で文字の書かれた墨書土器や文字の彫られたヘラ書土器が発見されている。土器に文字を記した意味は不明だが、5世紀のころ伝えられたという漢字が、地方へ普及してきた様子を語る一資料である。

P.36　製鉄跡

平安時代の集落跡からは、必ずといっていいほど製鉄に関係した跡が見つかる。芳賀でも石組みの炉で鉄を溶かし、この鉄を使って農具を作ったと思われる鍛治跡が発見されている。

鉄を作った跡からは、炭を燃やすときの送風具であるふいごの口や溶かした鉄を入れるルツボの破片、熱い鉄をはさんだ鉄鉗（P.37参照）そして多量の鉄滓（鉄かす）が出ている。

P.37　鉄製品

石器から青銅器、そして鉄器という世界の歴史の流れをふまずに、石器からいきなり鉄器も経験してしまった日本の歴史。この鉄の丈夫さや鋭さは、初めのころ一部の支配者たちだけのものだった。しかし、平安時代のころになると竪穴住居跡から鉄斧、鎌、刀子、鏃などが見つかっている。

このことは、一般の人々も鉄器をもつようになったことを物語っている。

P.38　巡方と丸鞆

巡方も丸鞆も銙帯（ベルト）を飾った金具である。こうした金具で飾られたベルトは、位のあった者がその腰にしめていたものである。芳賀にも位のある人が住んでいたのだろうか。

銙帯の実例は正倉院（奈良）に伝えられている。

P.39　砥石

鉄製品の普及は、砥石が住居跡などから多量に発見されることからもうなずける。砥石を腰に下げて田畑の仕事をしたのだろうか、ひもを通す穴のあいたのも見られる。

紡錘車

芳賀の人々はどんな衣服を身につけていたのだろう。実際には布の発見はないが、多くの竪穴住居跡から紡錘車が出土している。紡錘車とは糸を作るとき繊維に撚りをかけるための道具で、回転にはずみをつけた。

紡錘車には鉄製、土製、石製などがある。

〈鎌倉時代以降〉

P.41　永楽銭

明（中国）の永楽帝の1411年から作られ発行された銅銭。室町幕府三代将軍足利義満によって始められた日明貿易を通じて、大量に輸入された。そして、室町時代から戦国時代にかけて日本の基本的な通貨となった。

芳賀ではこうした銅銭が墓跡などからよく発見される。

P.42　墓跡

ときには人骨なども出土する。

五輪塔（空、風輪部）

仏教では全てが空、風、火、水、地の五大要素からなるとしている。この説にもとづいた石塔が死者の供養や墓石として作られた。

芳賀の発掘〈写真集〉

昭和56年８月30日　印　刷
昭和56年９月10日　発　行

発　行　前橋文化財研究会
〒371 前橋市大手町二丁目12番１号
電話0272－24－1111(代表)
編　集　前橋市教育委員会社会教育課
文化財保護係内
印　刷　有限会社　原田印刷所

裏表紙　　玦状耳飾（けつじょうみみかざり）

奈良・平安時代の竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）より発見

―芳賀東部工業団地遺跡・昭和53年11月・
直径　4 cm―